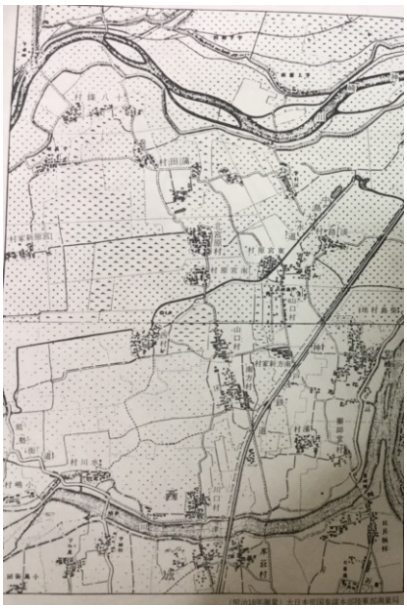
昔の「新大阪」付近

『新大阪の建設』のなかに、現在の新大阪や東三国付近の様子が記してあるので紹介しておきたい。



写真上は大日本帝国参謀本部陸軍部測量局、明治 18 年測量とある。神崎川下の蒲田村のあたりが、現在の地下鉄東三国駅、「UR 東三国」だろうか。「蒲田神社」も、蒲田村にある古くからの神社だ。淡路村「中島大水道」沿いに、いま東海道新幹線が走っている。先日も歩きレポートした。南宮原村あたりが新大阪駅付近であろう。

淀川の流れが大阪市域に入るのは、東淀川区江口から下流であるが、その南岸、北岸一帯の地域が、市に編入されたのは、大正 14 年の、第 2 次市域拡張の時期であった。東淀川区に入ったのは、西成郡中津町、豊崎町、西中島町、豊里村、大道村、新庄村、中島村、北中島村、神津町で本事業地区内関係の町名は、ほぼ、旧町村の大字名がそのまま町名になったものである。

しかし、この第 2 次市域拡張による市域編入は、実は簡単に話が進んだのではない。東淀川区の地域を視察に来た内務省係官は、新淀川と神崎川に囲まれた見渡すかぎりの緑の田畑に驚ろきながら、こんな純農村地帯を大阪市に編入するのは納得できないと、市域編入を容易には認めず、地元町村長が、市域編入促進の連署陳情書を内務省に提出したほどであった。

東三国町御堂筋予定地付近の農地

本事業区域は、そのような田園の中の町や村が、ほとんどそのままの姿を戦後に至るまでとどめていたと考えてよいのである。写真中は東三国町御堂筋予定地の農地。

「この地域は、神崎川の水位より土地が低く、雨が降ると、一面、湖のような情景を呈し、冬はよく五位鷺が舞いおりていたものである。水田では、刈った稲を舟で畦道まで運んでいたし、三国、宮原の蓮根は、大阪でも北河内郡に次ぐ特産物であった。戦後、昭和 23 年の農地解放で、小作農地が小作者自身の農地になり、昭和 30 年ごろから、それらの農地の切り売りの動きがはじまり、水田、蓮池などの埋立てが行われ、建売業者の土地の切り売りがはじまった」（東三国町住民）

東三国町の蓮池

写真下は東三国町の蓮池。

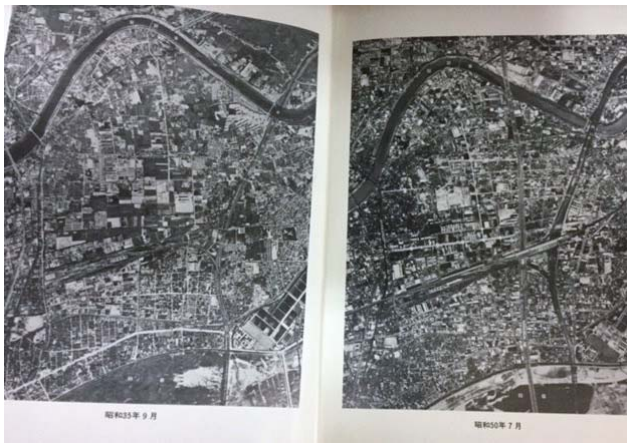
東海道本線から西側一帯の状況である。東側はどうか。

「啓発小学校下は、戦前は約 350 戸で、そのうち農家は 20 戸足らず。それが戦災で 200 戸に減った。土地所有者が借家を建てる動きは戦前からあり、戦後も年々増えていた。そこに新幹線が入り、市の土地区画整理の計画が出てきた」(山口町住民)

本事業区域の南部、西中島町に戦後移住した住民はつぎのように述べている。

「西中島町に来たのは昭和 23 年で、あたりは農地というよりは、戦後の自給自足という感じの畑であった。昭和 28 年に府営住宅が建ち、その頃から民間の住宅もぼちぼち増えてきた。ただし、土地が低いので大雨があるとすぐ水につかり、西中島小学校付近が、とくによく浸水した。下水が通ったのは、ようやく昭和 33、4 年頃である」(西中島町住民)

以上、本事業区域の簡単な見取り図であるが、要するに、戦前の農地が、戦後宅地化されはじめたものの、それは民間の無計画で部分的な動きであって、地域への道路、下水、その他の公共投資は、ほとんどされておらず、満足な都市施設というべきものは皆無に近い状態だったのである。



写真左が昭和 35 年 9 月、右が昭和 50 年 7 月。東海道新幹線の開通前後の変化を感じさせる。

下の写真は、2009 年 2 月の「淀川空中散歩」(淀川区役所『よどがわ』)。真ん中あたりに新大阪駅。新御堂筋と JR 東海道本線、神崎川に囲まれた地域が「東三国」、神崎川に接して、東海道本線近くに並ぶ高層住宅が「UR 東三国」である。

(2018 年 1 月 18 日)